

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第126回

『揺るぎない信念 ～ 気にさせる ～』

2022年9月10日 早稲田大学エクステンションセンター(早稲田校に於いて)で、講座『がんと生きる哲学 ～ 医師との対話を通して「がん」と生きる方法を考える ～』に赴いた。受講者の『心に咲く花会』の代表の森尚子氏から、「上野動物園」のパンダの写真が送られて来た(画像)。筆者の『言葉の処方箋: 「全力を尽して心の中でそっと心配する」&「ほっとけ きにするな」』が記載されていた。大いに感動した。講座は、テキスト『がん細胞から学んだ生き方「ほっとけ 気にするな」のがん哲学』(へるす出版)を音読しながら進めた。今回は、『第2章 病理医からみた臨床医』の『吉田富三 生誕100周年記念で学んだこと』を語った。

【最初に実施したシンポジウムは、2003年の「吉田富三(1903-1973) 生誕100周年記念公開講座」でした。 --- これはやるべきだと自分が思ったら実行する。そういう胆力が必要だと思っています。 やると決めたらやる。 自分に信念があれば、最初は疑問をもっていた人たちも徐々に気になってくるものです。 揺るぎない信念は人を惹きつけ、気がつけば自分の行動に賛同してくれて道ができています。 自分自身に確たる信念があることが重要です。 私が吉田富三の100周年記念のシンポジウムで学んだのは、人は説得するものではないということです。 人は気にさせるものなのです。 こういう経験を積むと胆力が養われて、自分の望む人生を歩けるようになります。】と記述した。

吉田富三は、【『自分のオリジナルで流行をつくれ』で、1) 顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家 2) 顕微鏡でみた癌細胞の映像に裏打ちされた『哲学』 3) 「がん細胞で起こることは人間社会でも起こる」=『がん哲学』、「事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを十分に発揮して大きな仕事をされた。」】と癌研時代の恩師: 菅野晴夫(1925-2016)先生から学んだものである。丁度、今週、福島県石川郡浅川町にある【吉田富三記念館】から、『この度、吉田富三博士没後50年・生誕120年記念事業としまして記念誌の発刊を計画進めております。』との連絡があり、『記念誌への執筆』の依頼を受けた。不思議な時の流れを痛感した。

全力を尽くして
心の中で
そっと心配する

樋野興夫



ぼっとけきにするな

樋野興夫

mejiro

